

顔とコミュニケーション 序説

—臨床・社会心理学的考察—

臺 利 夫

Face and Communicaton

—A Clinico-Sociopsychological Study—

Toshio Utena

We talk to one another, and we naturailly communicate a great deal through various movements. Facial behaviors not only interrelated with speech content, but is also found as the most refined medium of the nonverbal-omotional communication unaccompanied by speech.

The facial behavior of individuals, however, has to be understood also in the context of the objective environment of the face as a part of the body. It participates both psychically and physically in human communication.

While facial behavior structures the psycho-physical environment, it is structured at the same time by the environment. The relationship between facial behavior and the environment is so intricate as to appear circular. It may be said that such a process of interaction creates the meaning which is experienced by the person livin in the life-world. Though each individual and each thing in the environment are different and unique as such, they are involved in a common meaning and have, as it were, a similar face. If said interaction including the facial behavior, can build a certain system, the study of the interaction may foster the development of General System Theory which conceptualizes phenomenal similarities into structural isomorphies.

序：“顔”認知の不確定性

自分の顔の鏡像視は“顔”認知の不確定性を示唆している。はじめて鏡を見る幼児は別人の像を見るが、やがて自分であることを知り、さらに年令が進むにつれて、鏡に映る顔が鏡像であってしかも自分であることを知る

ようになるという。しかし成人が目的的に鏡を使って自分の顔を映す時には幼児といくらかは似ているが異なる形の分離的かつ統合的な体験をもつだろう。すなわち、化粧や整髪の際に道具としての鏡に映し出された顔の像は、自分であるとともに明らかに対象として捉えられるのである。人は自分の顔の物的

な面に留意しながら鏡を使うのでますます自分の顔の対象物としての面が強調される。

人は真の自分 real egoを表したもの（「真の自分」という言い方については後に検討する）をどこで求められるのか。日常生活で行動中の人の顔は場面の規定を受けているとはいえ、鏡像とは違った生きた主体としての表情をもつだろう。しかし行動中の本人は自分の顔を知らない。見ることのできるのは他人だが、その他人が当人と場を共有する関係にあると相手の顔をとくに注意することはない。また部外者による認知には部外者自身の主観や感情が加わるので、これもまた見られた人の真の顔であるかどうか疑わしい。さらに写真機やビデオカメラも真の表情を写しているとは言えない。カメラ自体の機械性のみならず場面の断片化と平板化によって、あるいは撮る側の好みによって被写体の真実から離れてしまうだろう…

このような考え方を推し進めてゆくと、ある種の分裂病患者が自分の鏡映像に「これは誰の顔か」と訝る場合や自分と同一の顔をもった人を見かけるという分身 (Doppelgänger) のごとき病理的体験も推定できる。

一体、自分や他人の真の顔は見ることができるのか。できるとすればどのような場においてであるか。顧みると、自分を顔に出すのも他人の顔を見るのも、いかにコミュニケーションすべきかという人間関係の問題である。この小論は“顔”認知のあり方を手がかりに、それがコミュニケーションにどのような役割を果たしてゆくかについて考える。臨床-社会心理学的考察である。

対面関係においては人が心情を顔に表すことと、その表出による他人への適応と他人による表情の認知は密接に関連し、同時過程的に成立するものである。叙述上、一応表す面と見る面を別けるけれども、性格学が傾きやすい人相見的分類や表情判断技術には焦点をおかない。生活世界での人の顔はこのように対象化すると主体としての意味を失うからである。むしろ対面関係の本

質的特徴を求めることから出発して、1つのシステムとしての顔のありようを検討していきたい。

1. 自分を顔に出す

「自分を顔に出す」とは心理学的に言うと、ある人のパーソナリティあるいは自我が顔に表出されるということである。パーソナリティはギリシャ語のペルソナ（仮面）から由来していること、それがギリシャの哲学者Ciceroのいう、「他人にそう見えるもの」、「人生において演じる役割」、「性質の総体」、「区別と威厳」の4通りを意味することも知られている。パーソナリティについて心身の統合を定義する立場からすれば、パーソナリティが顔に表れるという言い方もいささか妥当性を欠いている。情動の顔への表出として限定してみても、人間では猫のような直接的な表出は稀れにしか認められず、自我のはたらかで心情の表出と抑制が同時に行われている。つまりCiceroの4側面は場によって強弱の違いはあっても殆んど同時に捉えられる。したがって、その人の「真の自分」が顔に出るといっても、本来表出の側面のみではなく抑制の側面も含めて捉えるべきだろう。前者を強調すればいずれの表情にもその人らしさが表れているし、後者を強調すれば常にいくらかの虚構が入っているともしえる。しかし抑制の仕方にもその人らしさは見出せるから、顔は個別的・特定の表出と抑制の表情の反復・習性化を通じて合成的・統合的に形成されたものといえるだろう。

しかも顔には意識的な心情や体験が表出されるだけでなく無意識の心情も表れると解されている。時には体験の心情と表情がくい違ふ、いわゆる二重結合のコミュニケーションがなされることもある。これは精神病理的な問題として知られている事柄である。

ところで顔が皮膚で覆われた身体の一部であるにもかかわらず、腹や背中などとは違って受けとられるのは表情が当人の心理並びに社会と密接に関わって、すぐれて動的な境界になっているからである。だが顔もまた身体

の一部であり、物としての側面をもつ点も認めなければならない。顔は腹や背中と同様に見えの形では相対的な恒常性をもっている。この意味で顔のすべてが心とともに、状況とともに周囲の人が見誤るほど変化することはない。これは一方では本人に同一性を保たせるが、他方では自分の心の動きと身体の一部としての顔の間で亀裂を感じる事態も起りうる。「なんの顔（かんばせ）あって父老に見えん」とはこうした事態を示すであろう。事故等で顔に外傷を受けたり変形しても意志は強固であったり、外見上類似の顔をもつダウン症児が1人1人は個性があって心情の動きも異なるのもこれを裏書きしている。

顔は変化・形成的な面と不変・同一的な面の双方を担っている。顔は習性化された表出パターンのみならず本来の素質を基盤とする同一性を保つけれども、また成長、老化によりあるいは環境とのやりとりによって変化してゆく。環境との相互作用には多分に運命も関係する。こうした過程を経てつくられた顔は本人の歴史を負って独特の風貌を具えるようになる。Szondi, L. の用いた人物写真の診断テストが彼の運命分析理論に基くものであるのを想起させる。また恐らく顔の歴史性はCiceroの言う“威厳”の意味を含むだろう。壮年を過ぎれば自分の顔—歴史に責任をとることが求められるわけである。第二次大戦中、英国首相のChurchill, W. が顔の醜さを理由に閣僚を解雇したという言い伝えもこれを裏づけている。

ともあれ、顔は身体の一部としての特徴を保って静止している面と時間とともに変化する面の両方をもっている。人の顔を見る際には、見る側の体験として、見られる人とのそれまでの関係や会うまでの年月やその際の状況によって変らぬところがとりあげられたり、変化が注目されたりするのである。

2. 他人の顔を見る

自分を顔に出すことと他人がその顔を見ることが同時に成立するという関係を明瞭に示す例は、場を共有する表出者側と観察者側の

体験が同じではなくて違い違っている場合である。例えば政治家にとってテレビ出演は大衆に対して自分の偉大さや権威を宣伝する好機であるが、見る大衆の側からするとその政治家の不安や欺瞞が読みとれたりする。ソビエト政変時の8人のクーデター首謀者がテレビで表したものはこのような事態であったという。彼等にとってテレビ出演は逆効果をもたらした。

しかしここで注意すべきはテレビの社会的効力だけでなく、顔やその表情の背景にある社会・文化の影響力である。顔は個人の心の表れであるとともに社会的背景を表すともいえる。Allport, G. W. の指摘するように、東洋人にとっては南欧の人も西欧の人も北欧の人も顔を一蔑しただけではすべて一様に白人として捉えられるだけだが、白人相互の間では人種や地域や国による識別が鋭くなされる。同様な関係は東洋人同士の間にも当たるのである。これは膚の色の違いを超えて、経験された文化の異同の表情への反映を示すものである。

日常生活場面でいえば、特定の職場や宗教団体やクラブに属するメンバーの顔が仲間うちでは異なるが外部者から見ると1つのまとまりとして類似する印象を受けるのはよく知られている。例えばデパートの女子店員のある種の奇麗さは不特定多数の顧客に好感を与えようとするのであって、当の女子店員は個人的に見る・見られるの関係に立入りはしない。したがって、Whitaker, C. A. (1987) の例のように、もし顔を合せていくらか言葉を交しただけで「(客の) 誰とも親しい間柄になりました。一日に何十人という人と心を通わせることができました」と言う女子店員がいたら、この人のパーソナリティの偏りが想像させられる。

顔はまた時代によっても規定される。日本人も大正時代の顔と平成の顔ではかなり違った風貌を示している。もともと女性の顔の美しさは賞揚されることではあるが、現代ほどマスコミが顔の美を至上のもののように宣伝する社会は過去に例を見ないだろう。社会は女性美の規格をつくり、それが個々の女性に

反映して美しさの特定の型に基く美醜の判断を招いている。そして、顔の美も人間にとって大切な事柄の1つでしかないという、一層柔軟な価値観の入る余地をなくしている。

顔の美を過度に強調する社会と文化の価値観はまたできるだけ目立ち、他人に注目されることを可とするものである。この風潮はヨーロッパの中世のヒステリー的時代にもいくらか類似する社会病理現象ともとれる。そして個人病理の水準では従来から日本人に特有な対人恐怖や視線恐怖といった神経症的症状が減少しているとの報道がある。しかし自己顕示時代についてゆけない人間はますます退却し、引き込むわけで、登校拒否や登社拒否の増大も現代の他の一面を現すであろう。

視線恐怖の人は他人から見られることを恐れるが、たいていの場合、本人の方でも他人を見ている。本人の側で見るから見られた人が見返すのであり、元来見られているのではないかと気にして相手を見ることに事態が始まっている時もある。そしてその相手は異性の場合が多いようである。

しかし一般に、先進諸国の価値観では恣意的に他人の顔を見るのは失礼とされている。その理由の第1は、人の心の内を読む一私的な世界に立ち入ることになるからである。これはカウンセリングのような特殊の場ではむしろ積極的に活用されるが、日常の対人関係では恋人や親友同士のように相互受容と理解の要求が前提になるところで許される。

理由の第2は、他人を見るということは見る人が見られる人を多少とも自己の領分に引き込み、自分の期待に応じさせようとする方向性をもっているからである。人の顔に限らず、身の周りの物を見る際には常に自分なりの意味付与をおこなっている。人は半ば自らの心がつくる世界に生きているのであり、物自体を見ているのではない。自分なりに見ている以上、極端に言えば同じ品物も各自の認知する品物は別物だということになる。同様に他人の顔を見る際にもその人なりの自我関与がはたらき、いくらか見る人の側にとり込

まれるだろう。

他人の顔に魅力を感じ、ひきつけられる場合はどうであろうか。顔の魅力は必ずしもその美しさと直結するものではなくて、やはり見る側の捉え方によって相当な差が出る。つまりこの場合も見る側の意識的・無意識的な価値観や欲求が基底をなすのである。見る側が魅力を感じるのは相手との価値観の合致を信じたり、あるいは欲求の補充を体験するからだ、いずれにせよ、見られる人の心構えが関わり的一端を担っており、またそれが期待されている。心理テストのDAPやHTPにおける人物画では描き手のパーソナリティの投影：同一視と本人の自我を補う理想像のいずれか（または双方）が表れるというが、この機制も対人魅力の関係にみるものに近いだろう。

上記の事情は話し言葉においては一層明らかであり、見る・見られるの関係は言葉のやりとりの素地であることがわかる。言葉に関してはLacan, J. (1981) の言うように「…それは『信頼』つまり捧げられたパロールです。たとえば『君は僕の妻だ』とか『あなたは私の師』がそれです。これらのパロールが意味しているのは『君はなお私のパロールの中にあるものだ。そして私がそう言えるのは君という場で、このパロールを捉えているから…』」なのである。

実際の対面関係ではむしろ見る側の信頼と見られる側の心情が食い違う場合が起る。とくに見られる側が関係を歪んで捉えていると理解が困難になる。もし診察中の医師が患者に面と向った時、患者が「あなたは私の恋人です」と言えば医師は困惑させられる。これはArieti, S. が精神分裂病患者の思考様式について指摘した、主語と述語の逆転という古論理的形態に他ならない。つまり「恋人は私の顔を見つめる。あなた（医師）は私の顔を見つめる。だから、あなたは私の恋人」なのである。

分裂病患者との間は特例だとしても、第一印象での評価が相手の関わる場と食い違う危険は常に潜んでいるだろう。何度かくり

返して顔を見て、場による表情の変化も把握するうちに（心理的關係も同時に深まって）相手の魅力が増大することもあるが、また減退することもある。

しかし魅力を感じて相手を見ることは教育的効果をもたらす場合もある。ピグマリオン効果についていうと、机間巡視の際に教師は特定の生徒に期待をもちながら、同時に意識的・無意識的にその生徒の顔を見るだろう。見られた子どもはそれに敏感に反応するわけで、その結果として学習に励んで成績が上がるのである。

3. 人の表情・世界の表情

1) システムとしての顔

顔の型や表情を単独にとりあげて性格類型と結びつけるやり方は、顔の恒常性の一面をとりあげている。しかしその問題点は相手の顔を見る時には必ず自分の顔も相手に見せているという日常の対面関係の現実の場からの遊離である。見ている人は見ている自分の眼を見ることはないの、しばしば見ていることを明瞭に意識しない。そのため、相手から見返されてはっとして、あらためて顔を見るのが相互関係とともにあるのを知るのである。つまり視線恐怖症の人の例は多少とも一般化できるのである。それどころか、カウンセリングのような特定の場をつくるベテランのカウンセラーさえ、クライアントの顔を見る自分が同時にクライアントに顔を見られていることを忘れることがある。

むろん互いにしっかりと相手を凝視するように強られる場合もある。相撲の土俵上の2人の力士の関係を想起しよう。力士は顔と顔をつき合せて睨み合う。同じように真剣に呼吸を合せて立ち上る。この場では2人の力士の心は一つになり同じ表情になる。一つの顔が共有されているとも言えるだろう。顔だけでなく土俵も観客も共有される。観客も土俵上の力士と同一化して心をつなげる。その時、国技館全体が一つになる。つまり国技館全体が力士と同じ顔になる。

このような場は相撲をとる力士の間だけでなく、薄められた形では日常生活で話し合ったり楽しく笑い合ったりする人々の間でも生じている。家族の団欒の場では言葉のみでなく身振りや種々の非言語的コミュニケーションが顔のつき合せとともにすすめられる。むしろここでは互いが顔を凝視するようなことはほとんどない。その他の媒体がすべて顔をもつからである。家の中のインテリア、家具、調度品は多少とも家族成員それぞれの心情を表現し、それなりの価値を帯びている。ある物は成員間を結びつける意味を担っているが、各自の物も他の成員によって受容されているのでインテリアの全体が全体としての家族の価値観を示唆している。戸建ての家なら、建築物としての家屋もその家族の心を象徴している。

こうした心理・物理的共同体の中においては、会話に際してとくに面と向って顔を見る必要はない。言葉のやりとりでくい違いが出ることもさへある。しかもこのような逸脱的な発話に通じるのは聞き手と話し手がその場で対話を営める関係を確信しているからである。この可能性が開けるのはこの関係がある共有の表情を帯びた場であるからだ。増山真緒子氏（1991）は言う。その表情性は競合関係にあるサルの間でさえも認められる。競合においてサル達は互いの価値づけの基盤を見出しているのみでなく、その存在基盤自体をかなりの程度対自化していると推測される。顔の表情を含む「身体的な解放感…は対話の場に現出し…現出しつつある場の表情性と一体になるようにして、その対話の情状＝状況の意味を身体の上に描き出す」のである。

この論を極端に拡大すれば、顔は世界であり、世界は顔であるとも言えるだろう。だがここで注意を要するのは、いわゆる一体性、同一性はどこまでも文脈＝心理・社会的関係構造についてであって、見かけの同一ないしは類似ではないことである。土俵上で睨み合う力士も確かに形相は類似するけれども本来別の顔をもつ別人なのであり、むしろ相手を

睨みつけて圧倒しようとするのである。観客の1人1人も興奮・緊張した顔は似ていても、実はまったく異なる顔の持主である。家族全員も各自が個性をもった異なる顔である。それにもかかわらず場を共有し、同じ文脈に基づいて統合されて全体でまた一つの顔を表している。

元来、顔は眉、目、鼻、口などの異なる部分から構成され、全体として固有の一つの顔として現されている。ロールシャッハテストで無意味の複数のインクプロットが統合的にある表情をもつ顔としてイメージされることを裏返せば、それ自体としては特定の人の顔を現さない顔の各部分が全体として有意義な顔を現すのはPicard, M.のいうように神の業かどうかはおくとしても、心理学的にも留意すべき事柄である。

また、顔の表情状態の全体印象的の把握がたとえ一瞬でなされたとしても、実は輪郭—目—鼻—口—というふうに順を追って過程的に進むという説があるが、目を捉えた時に同時に多少とも顔の全体を認知に関わらせてとるのであり、各部分はその瞬間はなお不明ながら全体としての顔の一環としてのみ捉えられていくと考えるべきだろう。

以上を要するに、個人の顔に限らず、人と人の面談の場、人々の共有する社会・文化的な場では異なる人、異なる物が一つにまとまって一つの顔になる世界を考えることができる。人はそれぞれに固有の身体・生理的基礎、性格・生活態度、顔をもち、物はそれぞれに固有の物理的基礎—素材ないし加工物として人と自然の双方に接している。人も物も一方ではそれが担う諸条件に規定され、他方では関係の文脈の中で独自の存在目的—自己実現可能性を孕みながら、全体としてある総合体を構成する。それは家族をはじめとする種々の小集団であり、諸小集団を総合する会社や公共企業や地域共同体であり、さらにそれらが総合されての社会・国家であり、国際社会であるだろう。

もし個々の人間を内的にも外的にも開放さ

れつつ統合され、また自己組織力をもつ一つのシステムと仮定するなら、その人の顔もパーソナリティとともにシステムとして捉えることができる。このシステムが対人関係において開かれているなら、その対人的関わりは集団、社会、世界に向って開かれるであろう。逆に対面関係において閉されるならばより広い世界とも自己自身の内に向っても交流を失うであろう。そして開かれたシステムとしての対面関係において新しい発展や創造がなされるなら、時として世界を動かす可能性も生じてくる。顔をつき合わせるという小さな関係が世界の表情を変える契機となるのである。

2) 出会いと顔

人と人が一つの場を共有し、顔をつき合せて語り合い、それを機会に各自が固有の生き方、発展の仕方をする有意義な場合がある。これを“出会い”と呼ぶことができる。出会いについては概して言葉のやりとりと心の触れ合いが強調されるけれども、お互いの身体や顔がその交りに深く編み込まれることなしにそれは成り立たないだろう。この状況を明らかにするために、まず、操作的に出会いの場を構成したものとして心理臨床的場面をとりあげよう。

近年カウンセリングやエンカウンターグループでは、カウンセラーとクライアントあるいはクライアント相互の出会いをとくに重視している。クライアントは真剣に相談に応じ、理解してくれる人とここではじめて出会うのである。Rogers, C. R.はエンカウンターグループのあるメンバーが「私は他人をこれほど身近に感じたことはありません。私ははじめて他人の苦悩を私自身の現実の身体の痛みとして感じました…」と述べた例をあげている。この場合の「身体の痛み」という表現は新しい関わりの中での感銘に満ちた表情を自らイメージさせるものである。

また心理療法とくに存在分析の立場においても出会いの理念は重要である。この立場では出会いの偶縁性—運命的な機会の意味が強調されている。Boss, M.はその著書「現存

在分析と精神分析」(Boss, M., 1957) で次のようなBinswanger, L.の言葉を引用してこの点を明らかにしている。「患者と医師の関係は、そのつど独自の交通の新事実を、即ち新しい運命の結びつきを示すものであり、しかもそれはいわゆる患者-医師関係の意味での結びつきに止らず、むしろとりわけてまた真の共同相互存在の意味での純粹に共人間的な関係における新しい結びつきなのである」。転移も「出会いのひとつの仕方であり、そして出会いとは本来的な現在-つまり終始過去から未来への可能性を内にになうごとき現在-において共同相互的にあることである」。

さらにMoreno, J. L.について言えば、彼はサイコドラマやソシオメトリーにおける人と人の選択-拒否の関係をテレの概念に集約して出会いを捉えた。お互いが「今・ここで」出会うことで過去のそれぞれの体験を超えた共意識・共無意識がはじめて生じる。しかも両者の出会いは各自には隠されて見えない、それぞれの背後の人間関係を焦点的に現すのである(Moreno, J. L., 1953)。筆者の考えでは、これはまさに一つのシステムを意味するであろう、テレ関係は当人の人間関係のすべてを含む全体としてのテレ構造と相同性をもつからである。

以上のいずれの立場についても共通して認められる点は、出会いが相互共有的な場の担い手に新しい行路をとらせる契機となることを示しており、心理臨床的な場面はそうした出会いの高い可能性を期待して構成されているということである。

しかし出会いは本来、日常的社会生活場面においてこそすぐれて出現するであろう。とくに青年期において、自我の確立の第一歩においてしばしばかけがえのない人との出会いを体験する。変愛-異性との出会いをはじめとして、教師や友人との出会い、二十年近く馴れ親しんできた父親・母親の再発見という意味での出会いもある。これらはその人の人生の転機となり、以後の進路に決定的な影響を与えるのである。出会いは単に人間同志の

間に限られない。人と動物の間、人と物の間にも生じるし、西平直喜博士によれば、何人かの偉人は青年期に火事に遭ったことが転機となっている(西平, 1981)。

出会いが当人にとって重大な転機となり、それがやがてはなんらかの社会的変革に繋がっていった例は東西の歴史を顧みても数多く捉えられる。しかし人と人の出会いは当事者が面と向うことなしに果されるものではなく、歴史的な出会いについても当事者の顔がいくらか知っている場合にとくに生き生きと追うことができる。このような例の一つとして、本居宣長と賀茂真淵の間をあげよう。これは国文学者の佐々木信綱の解説書に負うところが大きいけれども、むしろ国語学者の田邊正男博士の講義を聴いた筆者自身の体験に触発されている。

古事記伝44巻を生涯をかけて完成した本居宣長は伊勢松坂の斜陽商家の出身で、22才の時に京都において医学を学んで医師となった。そのかたわら独学で国学を研究していたが33才の折にかねて私淑していた万葉集研究の大家である賀茂真淵(当年66才)と松坂の宿で出会うことになる。その後、両者の間では手紙のやりとりはあったものの面談はこの一回のみであり、6年後に真淵は死去したからまさに一期一会の出会いであった。だがこれを契機に宣長は古事記の研究に本格的に取り組むようになり、以後72才で死去する2年前の全巻脱稿まで36年間にわたって古事記伝の作製に全精力を注ぐのである。

宣長と古事記伝のその後の日本の文化・政治思想に及ぼした影響は甚だ大きい。たとえば彼の死去とはほぼ同時期に誕生した平田篤胤は青年時代に宣長の著書を見ていたと感動し、国学への志を立てるのだがやがて国粹主義・超国家主義の原動力になってゆく。宣長自身も尊皇の心は篤かったけれどもそのような発展までは気づいていない。これは歴史心理学の題材にもなるが、個人の認知に基く活動が担う、集団での“見えない”役割(Agazarian, Y., 1981)が社会的関わりのみならず歴史的

関わりにおいても生じることを示している。

宣長と真淵の出会いとその後についての挿話は人間関係研究の視点からみても興味深い。宣長は昵懇の書店で真淵が伊勢参りの途次に松坂へ来たことを知って、宿（新上屋）に急行するが既に出発後であった。そこで帰途にも新上屋に立寄ることを期待して手をうって、遂に出会うわけで、かなり一方的な執念である。

2人の間は、正座して背を伸ばして緊張した表情の若い宣長とゆったりとした老いた真淵の表情を描いた古伝の挿絵からもうかがえる。また宣長は生涯に2度—43才と60才の折りに自画像を描いている。画かれた顔は写真ほどの正鵠さはないが、天才や偉人の顔を手がかりとする人間研究家—KretschmerやPicardは顔の絵を主な資料にしており、それなりの研究価値を認めることができよう。とくに自画像は鏡映像のように、いくらかナルシスティックでしかも自身を客観視しようとする本人の心情とともに捉えられるものである。43才の自画像を見ると、眉は逆への字の形で眼は大きくはないが鋭く、鼻はがっちりとして耳は大きく、唇は小さいがしっかりと締められ、全体として端正で意志の強い表情を見ることができる。それに対して真淵について描かれた顔では、輪郭はふっくらした卵型、眉はハの字で眼は切れ長、鼻梁は長く先端でゆるやかに変曲しており、全体としてのっぺりとしてひょうひょうとした印象を与える。

この2人は性格もかなり違っていたようである。宣長は日常生活の何事にも几帳面で突飛な振舞いを好まず、彼の山桜の歌のように気どらずに生きていったが、真淵は万葉集を「ますらおぶり」と称したごとくに、おおらかだが大家としての権威をもち、男性的な威風を具えていたようである。顔も心情もこのように異なる両者であることがかえって宣長にとってその時真淵の風貌が強く一生心に焼きついて離れなかったともいえるだろう。

宣長はこの出会いによって真淵の門下に入

ることになったけれども、彼にとっては学問の真理こそが最重要であって、真理は権威を超えるものであったから、その随筆集（玉勝間）で「師の説になずむな」と述べていると佐々木は指摘している。他方、真淵は宣長の（万葉集に関しても）歯に衣せぬ鋭い質問に対して「万葉をよく知りもしないで異なった見解を言うならもう質問などするな」というような趣旨の怒った文書を返している。むしろこの葛藤は学問上のことであって、宣長は真淵の死をいたく悲しんでいる。

ここで留意すべきは私淑して漸く出会った師から離れて、宣長が独自の発展を遂げたことである。松坂の一夜は、人間の出会いは単なる同一視をもたらすのではなく、むしろその人なりの創造を生む機会になることを示している。むしろこれは出会いの当事者のそれまでの固有の体験と素質・性格と目的意識があつてのことであつて余人には生じえない。「松坂の一夜」の挿絵には宣長と真淵の他にもう1人、両者のやりとりを傾聴するようにかしこまって坐っている若い男の姿が見える。田邊博士によれば、対談に陪席者がいたことは知られているが、その男が誰なのかは未だに不明で、これを明らかにすることは重大な意義がある。仮りにその男を宣長の息子一本居春庭とすると年令的に合わない。直弟子の1人として誰かを想定するのも困難である。だがそれが誰であろうと彼等は宣長の学問の後継者ではあつたけれどもむしろ教育者で、宣長のような独創家ではなかつたのである。

…とはいえ、宣長と真淵の面と向つての出会いは江戸時代後期の社会を素地としており、社会自体がその後の激動を迎えようとしている時であつた。2人の共有した場は内に独創性を育み、同時に外に向つて大きく開かれて長い展望をもつものであつた。彼等の表情はまた当時の日本の表情でもあつたのである。

4. 顔と情報

通信工学用語の“情報”という言葉が心理学においても流行的に多用されている。だ

が顔の表情や目なごしがある種の“情報”を提供するという言い方には注意が要る。池田善昭博士は「…情報の背後にはつねに不確定性や規定不可能性の領域が広がっている…情報のレベルでは、それぞれの『個』はまさに変化する『システム全体』そのものと共時的であり、かつ同一的である…」と述べている（池田，1991）。つまり情報（刺激といっても同様だが）には部分と同時に全体—その場で創出される関係に応じた意味がどの程度含まれるかが問われねばならない。

例えば、ある種の分裂病患者は人と顔を合すのを怖れる。臨床心理士が面接をするのさえ拒む時がある。これは相手の心理士の顔から発する複雑で多量な情報を受けとめるには患者の自我は脆弱すぎるからである…などと解説される。Rojas-Bermúdez (1970) は表情の一定したパペットをサイコドラマ的に用いて、慢性患者のコミュニケーションを促そうとした。この場合の仲介物としてのパペットの利用は治療上すぐれた効果をもたらすことがある。しかしこの場合、単に顔を過剰な情報源として扱って、患者の反応をひき出す方法がとられたわけではない。実際、Rojas-Bermúdez自身は治療者—患者関係の全体を具体的に把握し、人もパペットも関係全体のシステムから割り出されている。

つぎにこの問題を情報処理そのものの側から検討しよう。一般にコンピュータは顔の伝えるものを情報として伝えるというが、顔がコンピュータの情報化の手助けをしている場合のあることをまずあげよう。Hancock, P. A. & Chignell, M. H. (1989) は、被検者にコンピュータ画面上に9次元空間で表される50個の点（数字群）を与え、これを5つのプロトタイプに従って分類させた実験の結果を紹介している。点のヴァリエーションを数字ではなく、多角形および顔の漫画で与えると分類の時間も誤りの平均数も数字—多角形—顔の漫画の順で良くなっていた。抽象的課題を適当に視覚表象化することで解決を促すのはコンピュータ操作に限らないが、これは人

が人の顔をゲントルト的に認識することによくに熟練しているからだ Hancockらは解説している。だが人による顔の認識の熟練の過程についてコンピュータはなんら解説しない。

他方、1960年代からコンピュータプログラム化された精神科医の患者への質疑応答例が出ていた。コンピュータがあたかも医師を演じて患者の訴えに対して筋の通った会話をしている。この当時、コンピュータは医師になれるかとの話題があったそうである。

今日の情報通信工学は上記のような種々の試みを総括するコンピュータグラフィックの顔を登場させて人と自由に対話することを21世紀には完成できると夢みており、実験的には既に一部成功している。原島 博博士のシンポジウム“顔”（1992）の講演にしたがってその手順を略述してみる。まずなんらかの顔—ふつう何十人かの顔の合成写真や顔の絵を用意する。顔の形状の3次元フレームモデルにこうした顔写真や絵を貼りつけて映像ロボットをつくる。

コンピュータに面した人とのやりとりの過程は以下のごとくである。送信側の符号器では構造モデルに基いて被写体画像の構造や動き、表情などの分析をおこない、その分析結果を記号化して受信側に伝える。受信側の復号器では伝送された分析結果に応じてメッセージを送るわけだが、それもモデルに当てはめられ、顔画像がつくられて表示される。これは音声もともなってマルチメディアインターフェースとなる。こうして、身体の問題から心の悩みに至るまで、クライアントの顔の表情をコンピュータが読みとって相談にのってくれるようにささねるだろう。

この過程で顔の表情分析の基礎にされるのがEkman, P.によるFACS (Facial Action Coding System) である。FACSは人間の種々の表情を記号化して44のAU (Action Unit) に分解する。例えば[AU 1]は眉の内側を上げる。[AU 12]は唇の端を水平にひく。[AU 44]は細目にする…などである。仮りにタイプAの人の顔の動きをこれで測定すると、タ

イブBの人に比べて睨んだり嫌悪感を示す点で有意に高いということになる (Chesney, M. A. et al, 1990). 認知科学の分野で心理学はコンピュータモデルに負うところが大きい。Ekmanの表情分析はこのような形で後者に利用されている。

情報通信工学の研究者もまたヒューマンコミュニケーションの原点としての顔を取りあげ、実現したいのは心の触れ合いである (シンポジウム "顔", 1992) という。だが歴史を担い、世界内存在としての人の顔という意味での顔つき合せでの豊かなコミュニケーションの場がコンピュータロボットとの間に構成できるだろうか。コンピュータは課題を解決できるとしてもそれ自体で目標をつくり出せないとCsikszentmihalyi, M. (1988) も述べている。同様に人間同士の出会いにおいて生じる創造がコンピュータグラフィックとの間のみで果して可能になるだろうか。

しかし上の疑問は情報通信工学上の成果が無意味だということではない。テクノストレスに注目するBrod, C.が、心理療法の情報理論への危険な傾斜を示すとして基本的には同じような立場をとるBateson, G.を非難したように、叙述の表面上の違いから内容を理解せずに批判することはできないだろう。コンピュータの成果も自分の視点で捉えて—それを反面教師として、心理学の立場で真に人間的な出会いとは何なのかを知る手だてにした方がよい。つまり、顔—表情がコミュニケーションの過程で他の心理・社会的なものとともに全体的な関係の中で生きることを前提にしながらも、それがこの過程で果す固有の役割は何なのか、また言葉や他の非言語的なものといかに関わるかが検討されねばならない。

以上この論文で述べてきたことは "顔とコミュニケーション" に関する諸説の輪郭を序説として記したもので、既述のさまざまなアプローチについては今後一層詳細な知見と課題を示すつもりである。

(本論文は平成4年初夏の昭和女子大における講演の草稿を添削・補足したものである。執筆の動

機を与えられた昭和女子大、新田健一教授に感謝します)

引用文献

- Agazarian, Y. & Peters, R. 1981 The visible and invisible group. London:Routledge & Kegan Paul.
- ボス M. 笠原 嘉・三好郁男 (訳) 1962 精神分析と現存在分析 みすず書房 (Boss, M. 1957 Psychoanalyse und Daseinsanalytik. Bern:Huber.)
- Chesney, M. et al. 1990 Type A behavior pattern:facial behavior and speech components. Psychosomatic Medicine, 53, 307-319.
- Csikszentmihalyi, M. 1988 Motivation and creativity. New ideas of Psychology, 6, No.2, 159-176.
- ハンコック P.A. チグネル M.H. (共編) 認知科学研究会 (訳) 1991 知的インタフェース 海文堂 (Hancock, P. A. & Chignell, M. H. [Eds.] 1989 Intelligent interface. Elsevier Science Publishers.)
- 池田善昭 1991 システム科学の哲学 世界思想社
ラカン J. [ミレール, J.-A. 編] 小出浩之 他 (訳) 1987 精神病 [上] 岩波書店
Lacan, J. 1981 Les Psychoses. Le Seminaire de Jacques Lacan, Livre III, Texte etabli par Jacques-Alain Miller. Paris:Editions de Seuil.)
- 増山真緒子 1991 表情する世界 新曜社
- Moreno, J. L. 1953 Who shall survive? New York:Beacon House.
- 西平直喜 1981 幼い日々にかいた心の詩 有斐閣
- Rojas-Bermúdez 1970 Puppets and psychodrama. Buenos Aires:Ediciones Genitor.
- ウィタカー, C. A. 成瀬悟策 (監訳) 1990 "討論" [ゼイク J. K. (編) 21世紀の心理療法 II 誠信書房] (Whitaker, C. A. 1987 "Discussion" in Zeig, J. K. [Ed.] The evolution of Psychotherapy. II)